

湊家に転生したが、趣味に走ってたら仲違いをした。

PHENEX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

湊友希那の弟として転生した湊悠真。

しかし、音楽なんて一切やらず趣味に走っていたら姉と喧嘩に発展した。

気まぐれに更新を致します。

リメイクを出しますが、リメイクではありません(?)

こっちはこっちで更新します。

目次

第6話	43
第5話	36
第4話	29
第3話	22
第2話	13
第1話	6
プロローグ	1

プロローグ

最近流行っている転生って知ってるか？

あれ、まじで起こるんだな。

大体はご想像通り、神様にあって転生するって話。

おっちんだ理由は風邪の悪化。たかが風邪なんて思って放置してたらこのザマだよ

∴

それで、病気が悪化したのがこちらの責任で——なんてまかり通ったものではなく、神様が暇だから転生させてやるっておっしゃられた。

行く異世界とやらは決まっっていて「バンドリ」とよばれるガールズバンドが主軸の世界らしい。

元々過ごしていた世界とあまり変わらない世界らしい。

さて、そこで1つ頼み事をした。

そう、金だ。

どんな世界にも金だけは信用出来るとどこかに書いてあったような気がした。

とりあえず頼み事は成功したと言っておこう。宝くじの当選番号を教えて貰った。

我ながらグスイことを考えているというのは自覚している。しかし、楽に生きたいと考えるのは共通していることではあると思う。

いや、そんなことはどうでもいい。

そのバンドリの世界に転生してから早十数年経過していた。

名前は湊 悠真。

趣味は前世からやってるプラモデル制作に、たまに気分転換でやる軽いサイクリング。アニメを見たり、ゲームをするのも好きだ。主にガンダム。チンパンは中毒性ですわ

家族構成、両親は共に健在で、一個上姉が1人いる。

音楽主軸の世界とあって親父は知らんバンドマンとしてメジャーデビューをしている。た。

正直、親父とも姉とも趣味が合わず、あまり仲が良くない。表面上は取り繕ってはいるが…

簡単に言えば、音楽が嫌いになった。

いや、厳密に言えば演奏をするということが苦手になった。聴くぶんには何も問題は無いが、弾こうとすると嫌悪感が出てくる。

あれは、小学校の時。

友達も作らず、家で筋トレかガンブラいじるか昼寝ばかりして俺に対してなにか習い事をしてみないかと言われた。

クラスに2人はやってる奴がいる定番のピアノとか、スポーツのサッカーとか。

最初は拒否したが、最後にほとんど強制的にピアノとサッカーをやらされた。

サッカーは小学校を卒業してから辞めた

ピアノはある程度やってからやめればいいかと思っていたが、そう簡単にやめさせてくれず、ずるずると引きずって、ある時、やめることが出来た。

それは中学校のくらいの時の話。

その日、ガンブラを塗装するためにサーフェイス吹こうと思った矢先。

「悠真ー！」

姉、湊友希那が部屋に飛び込んできた。

「どうしたの姉さん」

姉は、ひどく動揺した顔でこちら見ていた。

「お父さん、音楽活動辞めるって…！」

なんだ、そんなことか。

「ふーん…」

「ふーんって、他にないかないの!？」

「え…ないけど。要件はそれだけ？悪いけど、これからプラモの塗装するから出てつてよ。」

「お父さんの音楽が否定されたのよ！本当になんとも思わないの!？家族でしょ…？」

「いやだって、音楽性の違いとかあるし…。」

事務所に所属してたんでしょ？だつたらもうその時点で自由にやらせてもらえるわけないじゃん。

ていうか音楽と、家族。関係あるか？」

この時、姉の雰囲気が変わった。

「そんな、そんなつまらない趣味なんかやっているから家族のことも理解できないのよ！お遊びにかまけてる暇があるならそれを家族に向けなさい！」

「はあ!?!姉さんに趣味のどうこう言われる筋合いなんてないダルオ!？」

「これが遊びだつて言うなら俺から見た音楽だつて遊びだ!!」
「音楽は遊びじゃない!」

この後、姉と取っ組みあいになる手前まで喧嘩をした。

しかし、中学を卒業しても仲直りはできなかつた。

正直合計40歳行きそうないおっさんが年下のお嬢ちゃん言い合いになるなんてことないはずなんだが、体に精神が引っ張られて完全に頭に血が上つていた。

でも、本気でやっているものを遊びと評されたのは本当に許せないことだから謝らうとも思わない。

結局この後、ピアノをやめ姉との会話もなくなつた。

そのあとは習い事を初めては途中で辞めるということを繰り返しいつの間にか、俺は高校1年生になつた。

第1話

姉とは違う学校に行くため、最近共学化した花咲川学園高校に入学してから早数週間。クラスはAクラス。最近共学化したのでしようがないことなのかもしれないが、大体のクラスは殆どが女子だ。

Aクラスの男子は俺だけ。

必然的に話す人なんかおらず、ぼっちになっている。

だがしかし（言いたかっただけ）

オンラインゲームでいつもパーティーを組んでいる人が2人ほどいるからそこまで寂しくない。

体育の授業では男女で別れるからそこまで疎遠って訳でもない。

「じゃあ今日はここまで。」

ついでに今授業が終わった。

最近はあるバイトをしていたから忙しかったが今日は無いため暇だ。

「…ゲーセンにでも寄っていくか。」

今日はガンダムをしていこう。

ガンダムとは2 on 2のシャッフルと2人でチームを組んでやるか、CPUを相手にするかという覚醒ゲーだ。

始めたきつかけは前世からやっていたから。

こつちにもあるって知った時は本当に嬉しかった。前世と同じように環境トップはリボーンズと試作三号機。

俺が使っているのはストライクフリーダムとフルアーマーユニコーン、フリーダム。中々今の環境相手だときついが、慣れれば勝てる。階級は大佐星五。

そういえば、最近組んでいた相方が引つ越したから相方探してたんだけど…いつもの2人にやってるかどうか聞いてみようかな。

「はあ…シャッフルの闇は怖いな…」

ゲーセンのゲームで久しぶりの大惨事をやらかし、

“助かりました助かりました次もよろしく”をされた。

大戦犯でごめんなさい…

いや、でも“前に出ます前に出ます撃破されました！”とか他にも戦犯いたからア！

とりあえず家に帰ってきて、自分のパソコンを開き、いつものゲームを開いた。

『こんばんわー』

『あ、ユウマさん!こんばんわ!』

『こんばんは、ユウマさん』

チャットを開き挨拶をするいつもの2人、アコさんとリンリンさんだ。

『ゞ(・▽・)ネエネエどっちかゲーセンのガンダムやったことある?あのカプセル入るほうじゃないやつ。』

『うーんアコはやったことないです』

『あ、私家庭版なら何度か…』

『ほんと?リンリンさん1回組んでみてくれない?確かこの辺に住んでるって言ってたよね?』

『え…でもユウマさんそれってリアルで合わなきゃいけないんじゃない?』

『あ、そっか…一応○○のゲーセンんだけど、もし良かったら明日の5時くらいに来てくれない?あ、一応1人でも行く予定だからそのへん気にしなくていいからね。そいじゃ今日のクエ何行く?』

『アコ、ドラゴン倒しに行きたいです!』

『それじゃドラゴン狩るぞお!』

夕飯になるまでやっていたが、リンリンさんからは返事を貰えなかった…が、もしかしたら来るかもしれないので、シャツフルになれるために、と自分で自分に言い訳して明日は絶対に行こう。

なんにも考えず、普通にぼーつと授業を受けていたら、いつの間にか放課後なっていた。

とりあえず5時まで時間あるし、1回うちに帰って、ロードで行こうとしてたらいつの間にかとつづくに4時30分を過ぎていた。家からは30分かかるかどうかなのでもし来てたらやばいので本気で漕いで35kmで向かった。

「ハア、ハア…つ、着いた」

ゲーセンの中に入って携帯の時刻を確認。
セーフだ。

「あ、あのやめてください…」

「ええー？いいじゃーん一緒に遊ぼうよー」

「別に彼氏を待つてゐるってわけじゃないでしょ？」

おっと、あちらにいるのは同じ学校の白金燐子先輩では？

ほかのクラスの男子が胸がでかいとか騒いでたような希ガス。

仕方がない。同じ学校の先輩、しかもかなりの美人さんだ。放置するなんて罪悪感で死んでしまうかもしれない。

とりあえず助けて差し上げましょう

「あの…すみません」

「ああ？なんだ今忙しいんだけど？」

「ああいえ、そちらの方うちの学校の先輩で、流石に嫌がつてるのを無視して遊ぶのって気分悪くなるじゃないですか。」

「はあー？なんだ、助けに来ましたってか？」

ヒヤハハと、悪役っぽい笑い方をするナンパ男A。

白金先輩はまだ、怯えた目をしているが、ちよつとだけ希望を持ったような瞳をして
おる

「まあそうですね。とりあえず先輩を放してあげてください。」

「…おい、あいつ、最近この辺のゲーセンの奴ら叩きのめした湊って言うやつじゃねえか
？」

「おや？最近ガンダムで負けた腹いせに、金を寄越せって襲ってきたヤンキーをぶっ倒して逆に金を奪い去った覚えならあるけど…」

「…ま、まじかよ…叩きのめされたのってここら辺じゃ有名な金山だろ？」

「す、すいませんでした！すぐに離します！だ、だからお金だけは…！」

「ご、ごめんなさい！」

と言つて立ち去つてしまつた…

「…助けていただいたてあ、ありがとうございます。」

えつと…」

「いえ、とんでもない

それと、湊悠真です。」

「…も、もしかしてユウマさん？」

このパターン、青！

間違えた。

もしかして

「リンリンさんですか？」

「あ、やっぱり…！」

ここからラブコメでも始まるのだろうか…

え？てか本当にきたんだ…

第2話

ゲーセンにて助けた(?)先輩がいつもオンラインゲームをやっていたリンリンさんだった件について。

「…え、えっと、とりあえずガンダムやりましょうか。それと、敬語は無くてもいいですよ」「うん…分かった。」

それと、最近は全然、やってなかったので、御教授よろしくお願いします…」
どこことなく会話がぎこちない。

そういう俺もぎこちないのだが。

「えっと、先輩はどんな機体を使いたいか、使ってたとかありますか?とりあえずさつき貸切にしたのでゆつくりとやっていきましよう!」

「…え?貸切にしたの?」

「ええ、後ろで色々言われるのは嫌でしょう?だから今日は貸切にさせてもらいました。それに今日誘ったのは自分ですからそれくらいはさせてもらいますよ。」

「で、でも…流石に…それは悪いかな…」

「あはは。まあ気にせずやりましょ。」

それよりも機体ですよ！オンラインだと魔術師でしたよね？じゃあケルデウムとかですか？」

「…じゃあ今日はお世話になります。

機体はケルデウムとか、他にもサバーニヤとか使ってみたいから…今日はよろしくね？」

と、控えめだったが、綺麗な笑顔を見せてくれた。

「…」

「?どうしたの?顔が、赤いよ?」

いや、尊すぎる…こんな純粋な子にあんなガンダム動物園に入れてしまってもいいのだろうか…

「いや、なんでもないですよ。そういえば、家庭版はアケコン使っていました?」

「うん。限定版、だったから」

「おお流石ですね。

あ、そうだ。このカード使ってください。」

「?このカードって…」

「記録用のやつですよ。自分も新しいヤツ買ったんで初めからやりましょう。」

「あ、ありがとう…」

流石に、ウザがられたかもしれない……でもリアルで会うってやつぱり怖いと思うし来てくれたならこれぐらいするべきだと思うんだよね……

「じゃあ、まずケルディムで、タッグ組んでCPU3戦やってからオンラインでやりましょうか！」

白金先輩の隣の筐体にカードをかざす。

「じゃあかざしたら……そうそう一番右のCPUのやつ選んで。」

あ、さっき言ったように、CPU戦を3回やったらタッグのオンラインに混ざるようになってますから。」

白金先輩は頷いて、自分と同じように操作して行く。

「えっと、機体は……ケルディムでしたよね？じゃあ自分フルコーン使いますね。ステータスはサイド7で……トレーニングを選んで……そうです。」

始まったら好きに動いてもらっていいですよ。」

とりあえず白金先輩のプレイしてるところを見ることにした。

やはりケルディムは味方のロック集めがうまくいかないとかなり負担がかかる機体だから、こつちがどれだけ動けるかにかかっている。

「……普通に使えてるな。」

フルブからの変更点であるシールドビット解除による降りテクをちゃんと使っているし、基本であるブーストを残した青着地、高跳び等など要点を抑えている。それでいてあまり前にブーストしない。

普通に上手いやんけ（白目）

白金先輩はササツと3ステージ目をクリアしてオンライン回線に入った。

「えっと、とりあえず自分前に出ますね。」

「は、はい…よろしくお願ひします」

『よろしくお願ひします』

『よろしくお願ひします』

『前に出ます／援護頼む』

試合が始まった…！

『ありがとうございました』

『ありがとうございました』

「いやー助かりました。普通に上手いじゃないですか！」

「い、いえ…昨日、家で少しやってきたので…」

なんて優しい人なんだ…急な話でも来てくれて…家で練習してくるなんて…

「それじゃ次もよろしくお願いします！」

「は、はい！が、頑張ります！」

結局この日は2時間ぐらいやつて、ゲームセンターから出た。

最初にあつたお互いの緊張もいつの間にか解れ、さらに階級は中尉まで掛け登り、もう少しやればすぐにでも少佐になれそうだ。

覚醒したマスターの横ムチに当たり前のようにカウンター挟んで落とすなんてこともしていたし、かなり冷静に動いてくれていた。少尉とかの階級でもものすごくうまい人がいたりとかして、ヒヤツとしたことがあつたが、ササツとフォローを挟んでくれて助かった。

10連勝をした時は一緒にはしゃいでしまつてハイタッチなんかもあるぐらいには仲が深まつたと思う。

ついでにハイタッチのあと白金先輩は顔を真っ赤にしてそれはもう、とても可愛かつた。

「白金先輩、今日は色々ありがとうございます！ございました！俺の方が介護されちゃいましたね」
「ううん！こちらこそありがとう…。」

久しぶりに楽しめた…。また、呼んでくれたら…。」

「ええ！プレイスタイルとか良くあつてるんでこつちからお願ひしたいくらいですよ！じゃあ今日はもう遅いんで送りますね。家はどつちの方向ですか？」

「えつと、ありがとう…。家はこつち。」

意外にもあつさりとして承してくれたな…。少しはちよつと仲は良くなつたとは思うけど、少しぐらい警戒してもいいと思うけど…

この後、ガンダムの動きに関して何が、悪かつたか議論してから帰つた。

家庭版にいなかった機体について色々勉強してみる、と握りこぶしを作つて意気込んでいた白金先輩はとても可愛いかつた、とだけ言つておこう。

「こつちが、私の家」

「…で、でかい…」

思わず呟いてしまうくらいには家がでかい。

結構裕福な家庭みたいだ

「それじゃあこれで。」

「送つてくれて、ありがとう…」

「いえいえ。こんな時間に女の子を一人で帰らせるわけにはいかないから。」

あ、そうだ。L I O Eとかやってますか？これからも誘うと思うので、交換しませんか？」

「…ちよつとまつてて…、えつと、このアプリかな…バーコード…はい」

あまり使ったことがないのだろう、少しぎこちない感じだったが、すぐにバーコードを提示してくれた。

「ありがとうございます！それじゃあ…」

アプリの読み込みを起動させてバーコードを読み取って、すぐに友達登録をした。

「じゃあ今度こそ帰りますね。学校以外は基本的に暇なんで何かあればメッセージ送ってください！」

「うん、ありがとう。またね」

そう言って白金先輩は控えめに手を振りながら微笑んでくれた。

控えめに言って天使か。

それにまたねって言って貰えたから、今日は本当に楽しかったってことなのかな？
思わずガッツポーズをしてしまった

「たーでーま」

「おかえりなさい」

家に入ったらすぐに母さんが返事を返してくれた。

「お、悠真。おかえり。」

リビングに入ると、先に帰ってきたのだろう親父がソファで寛いでいた。

親父がバンドをやめて、すぐに習い事のピアノをやめたあと、しばらく険悪な雰囲気だったけど、時間が経ったら会話をするくらいには仲が回復していた。

「今日は遅かったな。またゲームか？いくら宝くじがあたってお金があるからってあんまり遊びすぎるのも良くないぞ。」

同じくソファに座ると親父はそういった。

「ああ、そうだよ。オンラインでいつも一緒だった人が同じゲームやってて、しかも近くに住んでるらしかったから、組んでもらった。」

それにお金があっても頭がなきや生きてけないから。流石に勉強はちゃんとやってるよ」

「そうだったな。成績も上位に行くほどだもんな。」

それと、良かったじゃないか。最近組んでる人が引越したって嘆いてたもんな。」

「ん、まあ良かったんだけど、同じ学校の先輩だったんだよね。」

「ん？悠真の学校って元女子高だろ？その組んでくれた人は女の子だったってこと？」

「そうそう。だからちよつと気ままずくて。最後の方は普通に話せるようにはなつたけど。」

「気ままずいっていうか、少し緊張してしまうの方があつてたかな？」

「悠真にも春が来たって感じか」

と、笑いながら親父はそういった。

いや、春ってわけじゃない…え、違うよね。

「まあ、たしかにすごい美人さんだったけど。まだ分からないよ」

結局その日は夕飯になるまで親父と世間話をした。

第3話

白金先輩とタッグを組んでからしばらく。

いつものオンラインゲームを3人でやってる時に事件は起きた。

『そういえば、リンリン。明日バンドの練習あったっけ?』

『そうだよ。アコちゃん。』

「ば、バンド…?」

そう。あの親父が夢中になっていたバンドである。

『へえー二人ともバンドやってたんだ!』

もしかしてフェス目指してたり?』

『あれもしかしてユウマさん、バンドのこと詳しいんですか!?!』

『んー?そこまで詳しいってわけじゃないけど…(・▽・;)』

『それじゃあ楽器やってるとか?(・ω・)』

『中学の頃はやってたけど、親父がバンドやっててそれをやめた時に一緒にやめちゃったなあ…』

「…今思えばそんなつまらないってわけじゃなかったからなあ…」

ただただ無理矢理やらされるのが嫌だっただけで。」

『ユウマさんは、楽器は何をやってましたんですか？』

『ああ、ピアノをちよつとね。』

幼い頃にずつと家に引きこもってたから、半強制的にやらされてたんだ。それが嫌で、親父の件が重なってちよつと良かったからやめたんだ。』

『ご、ごめんなさい！軽々しく聞いていいことじゃなかったですね！』

『ゞノ・ω・ゝ）イヤイヤ

気にしないでそんなこと。

もう終わったことだし（笑）

それよりそろそろ限定始まるよー！』

『おおつとまずい！ユウマさん、りんりん！行くぞー！』

いま、体育館にて体育の授業中だ。

うちは男子が少ないからクラス関係なく集まって、バドミントンをやる。」

「男子ー！頑張ってー」

と、女子からの応援もあり、男子はかなり盛り上がり上がっている。

今回のバドミントンはダブルスのはずだったが…

「おっしやッ！相手は湊一人だ！」

「いいところ見せられるぜ！湊、悪く思わないよ？」

何故か人が足らず、俺だけハブられた。

「ぼっちって悲しい…」

「いいだろー？お前中学の頃途中からバドミントンやってたって聞いたぞ？」

バドミントンじゃねえバドミントンだ。

そう。あれは、ピアノをやめたあと。

ちよつと筋肉つけたいなーと思って端から1ヶ月間だけサッカーを除いた他の全て

部活を体験した。

最終的にバドミントンにて卒業するまでやっていたのだ。

「はーい、試合開始！」

「行くぞー！」

相手からのスタート。

高校にもなるとバドミントンなかなかサーブが上手い奴がいる。が、今回は相手が下手なやつだった。

「おおい！上にあげんなよ！」

そう。

みんな大好きスマッシュの時間だ。

「今日の私はチンパンだツ!!」

「うわあッ！いきなりスマッシュ!?容赦ないな！」

「ごめん安田……」

「いいつて気にすんなよ。」

「次サーブ行くぞー」

「ばちこーい!!」

相手側を狙ってゴール（ネット）にシュー！

「超エキサイティン！」

シャトルは、線のギリギリに落ちた。

「バトルドームじゃねえ！」

容赦ねえな……」

「ほらほら次行くぞー」

「あはは！ほら来いよ！」

「やべえ、田中が壊れた！」

結局この試合は普通に圧勝。

「ふっ…経験者に勝とうなどと甘いのだよ」

「バドミントン、今度教えてくれよなあー。」

と、田中と安田と話していたら、急に田中が

「あ、そうそう最近みんなに聞いてんだけど…」

「ん？気になる女子？」

「そう。俺は白金先輩が好みでさ。」

「お前巨乳好きだもんな」

「いやいやみんなそうだろ。」

「いや？俺は貧乳が好きだ。」

なんて安田と田中が言い合っていた。

しかしなんだろうか…この、田中が白金先輩のことが好きと言った時に何か、胸に引つかかったものがある…

「…い、おい湊！次お前の番だぞ！」

「お、おう分かった！すぐ行く。」

結局、この日のトーナメントは準決勝で敗退。

相手が経験者だったってのもあるが、白金先輩のことを考えてたら集中出来なかった。

今日は初めて白金先輩から誘われた。

「…今日はよろしくね。」

「あ、はい。よろしくお願いますー!」

今日はいつもと違って白金先輩が、サバーニヤを使ってみたいと言っていたので、自分はレッドフレーム改（チンパン）を使った。

勝率は6割となかなか良かった。

しかし、どうしてだろう。

白金先輩と一緒にいるとかなり癒される。

まさか、これが恋!?

いやいや、そんなわけないだろう。

今日も今日とてガンダムやって、その帰り道。

「ゆ、ユウマくん！ちよつと頼み事があつて…」

一緒に帰っている白金先輩は緊張気味にそう言ってきた。

「なんですか？俺に出来ることなら協力しますよ！」

「家に、寄つていきませんか？」

——頭が真っ白になった。

第4話

「ま、前に、ピアノをやったって言ってたから、アトバイスが欲しくて……
ですよね——！」

いや、焦った……なんか、焦った（語彙力低下）

「え、ええ。でも、こんな遅い時間に大丈夫ですか？」

「……今日は、お母さんもお父さんもないから大丈夫。」

それは大丈夫じゃないです。大丈夫じゃないです。大事なことなので（ry
しかし、ピアノか……。聴くぶんには問題ないか。もしかしたら嫌悪感も消えてるかも
しれないし。

「えと、じゃあ、お邪魔しますね！」

「……うん……！ありがとうございます……！」

と、とびつきりの笑顔を見せていただいた。

そして、内心かなり緊張しながら白金家に向かった。

白金家にお邪魔して、リビングに通され、少し待ってるように言われた。

「しっかし、大きい家だなあ…」

リビングは広く、天井も吹き抜けで開放感溢れる家だった。

それとプラスしていつも香ってくる白金先輩の良い匂いが漂ってきて…もうずっとここにいたい…

「…お待たせ。そのまま私に着いてきて」

しばらくしたらリビングのドアが開き、そこから顔だけ出した白金先輩はそう言つて扉を閉めた。

「ちよま…」

置いてかれたかと焦つてドアを開けたら、そこには私服の白金先輩がいた。

そう。私服である。

白い生地にも、胸元にリボン。まるでどこかのお嬢様のようなだ。

ん？お嬢様じゃね？（困惑）

そして、白金先輩はこちらを見た後、そのまま歩き出した

「服、似合ってますね。」

「え…うあ、ありがとうございます」

前を歩いている白金先輩の艶のある黒い髪の間隙から赤くなっている耳が見えたので満足です。

「……ここが、私の部屋」

白金先輩は部屋のドアノブを回して扉を開けてくださった。

「おお……広い……」

白と黒を基調とした綺麗なお部屋だった。

部屋の奥にはいつも使っているであろう机と、その上にデスクトップパソコンが。

隣にはランドピアノ。

!?

「え、ランドピアノ?!?部屋に!?!」

そう、部屋にランドピアノである。

「えっと、ここにあった方が、弾きやすいから……」

「そ、そうなんですネ……ちよつと触ってもいいですか?」

「うん……いいよ。」

了承を得られたので、ランドピアノの鍵盤蓋を開き、鍵盤に触れる。

ドレミファソラシドの順番で押してみる。

ついでに部屋を見回してみると壁に湿度計がかかっているのが見えた。

湿度は50%で保たれているようだ。

「……ちゃんと調律もしてあるし……湿度も50%……」

黒い鍵盤にも指紋はひとつもなく、いつも綺麗にしていることがわかった。

そして、未だに嫌悪感、消えていないということも。

「じゃあ、白金先輩。始めますか」

「…よろしく願います。」

「バンドでやってる曲の譜面見してもらってもいいですか？」

「えっと…」

白金先輩は鞆から重なった楽譜を持ってきてくれて、そのまま渡してくれた。

「えーっと、〃BLACKSHOUT〃…か。」

和訳は黒い叫び…なんで今和訳した？

いや、それよりも中身だ中身。

………

全体的にメタルみたいな感じか…あと、ゴシックな感じか。

作者は…〃湊 友希那〃…

姉さんの曲…なのか。

い、いや別に？ 姉さんに対して？ 中学の時のあれ引きずってるなんてわけじゃないし

？（震え声）

「なにか、ありましたか？」

「ファツ?!いやなんでもないです。と、とりあえず一回弾いてみてもらってもいいですか?」

とりあえず姉さんのことは頭の片隅において、アドバイスに専念した。

「今日は、ありがとうございます。」

「いや、そこまでアドバイスするところなんてなかったから。」

逆にお礼を言われるほど何かしたのか、疑問に思うレベルですな。」

あの曲を聴き、アドバイスとか色々していたら、いつの間にか11時過ぎていた。

って言ってもほとんど直すところなんて無いくらいに上手かったのでアドバイス出た来ていたのか不安である。

「そ、そんなことないです。客観的にずれてるところとか教えていただけのだけでも助かりましたから!」

と、軽く頬を染めて言ってくれました。

可愛い(直球)

「そう言っただけなら、良かったです。」

それと、久しぶりにピアノを聴けたので良かったです。

遅くまでお邪魔しました。」

「はい。」

こちらこそ付き合ってくれてありがとうございます。ごさいました。

その…また、誘ってもいいですか…?」

上目遣いでそう聞いてきた。

そろそろおなかいっぱい過ぎて破裂しそう（歓喜）

ただでさえ可愛いのにそんな仕草されたら惚れてまう…

しかも、また白金先輩の家に来れる? それなら全然苦にもならないね!

むしろこつちからお願したいね!

「もし俺でよければいつでも呼んでください!」

「良かった…それじゃあ、また誘うね。」

周りに花が咲きそうな笑顔で喜んでくれた。

前に人付き合いが苦手と言っていた白金先輩が、また誘うって言ってくれるほど信頼をされている。

思わず勘違いしそうになるくらいに好意を示してくれていることがとても嬉しくなった。

「ええ!じゃあ、おやすみなさい。」

「うん。おやすみなさい。」

気分は有頂天。ルンルン気分で帰宅をした。

両親に心配されるくらいにテンションが高かった俺は気が付かなかった。

「湊オ……あの屈辱は必ず返す……どんな手を使ってもなア……」

第5話

あれから早数日。

今日も今日とて学校に行く。

いつもの通学路は猫耳みたいな髪型した女の子が金髪のツインテールの女の子に絡んで、百合百合しているのはもはや日常の一部だし、その中にクラスメイトが居たって気にしない。

そういえばそろそろ文化祭があるのか。

うちのクラスの出し物は何やるんだろうか。

ホームルーム。昨日は0時近くまで塗装してたため、とても眠かったので寝てました。

そうしたらこうなった。

「という訳でうちのクラスはカフェをやりまーす。うちのクラスで唯一の男子ー！せっかくだから髪型とか全部整えて貴方だけ執事やりなさい。」

「おーいいねー！」

「まじ？寝てたから半分くらい聞いてなかったんだけど…」

いつの間にかクラスの出し物を決めてたらしい。

しかも執事？

「ヘアセットだるいんだけど…伸びてきた髪の毛切ればいい？」

「それでいいや。宜しくねー」

ここで変に断ると女子から虐められるので従っておくこと。

しかし、来週から準備開始か…。

体育。やはり男なら一番楽しめる授業ではないだろうか。

今日はバスケ。しかも、隣のコートに授業が被った2年生の皆さんが観戦してらっしゃる。

あ、白金先輩いる。やる気出てきた。

「はいそれぞれ5人作って…って言っても2チームしかできないんだけどさ。」

「じゃあAチームが湊、安田、田中、中島、島田。」

Bチームが北原、佐藤、鈴木、渡辺、有賀な。」

うまい感じにパワーバランス別れたな。

こっちは安田と田中が、あっちは佐藤と渡辺がバスケやってたらしいからな。

「じゃあ始めるぞー！」

笛を吹かれ、試合スタート。

ここは2年の先輩方にいいところ見せないと。特に白金先輩。

「よっしやー！」

「やべ」

先に相手のBチームにボールが渡った。

「前に行け！前！」

いきなり激しめですなあ……。とりま相手の3ポイントあたりによ。

安田と田中に任せよつと。

あ、シュート打たれた：けど外れた。

安田が回収してこっちに投げてきた。

「湊！パス！」

「ナイパー！」

受け取ったボールをその場で撃つ。

そう。バスケット部に体験で入ったとはいえ、1週間滞在したのだ。ある程度、できる。が、これが入ったのはまぐれ。しかし、相手のペースを崩せたのでいいだろう。

「おお!!湊ナイサー！」

チームメンバーがハイタッチをしてくれる。

見てる先輩方からも歓声が上がった。

ちよつと嬉しい。

「まぐれだまぐれ！前に出ろ！」

Bの玉からスタートで、そのまま普通に決められ、3―2。

「よっしや、湊！そのまま決めてこい！」

何故か、田中と安田は前に出ず、後ろに下がっている。いや、すぐ近くに佐藤と渡辺がいるのか。

とりあえずドリブルをしながらブロックに来た北原と鈴木をパス。

「貴様に私が止められるかな？」

とか言いながらブロックに来た有賀をパスをしようとしたらボールを取られた。

「はっはっはー！すり替えておいたのさ！」

「有賀、よくやった！」

「どこのスパイダーマだ！」

安田、すまん！」

「いいよ、次々！」

そんな感じで試合が進んでBチームに決められ、相手は73。今は73―72で負けている。

とりあえず、ここで頑張つて勝ちますか！

そういえば途中で髪をオールバックっぽくしてみたらあつちでちよつと声が聞こえたような…いや、思い込みか。

「田中！ボール！」

「お、おう！」

汗で滑る体育館をドリブルしながら走り、目の前に渡辺が立ちはだかった。

「ここで止める！」

「つく！」

フエイントの掛け合いになろうとしたところで汗で渡辺が滑り転じた。

「あいつたー！」

「誰に会いたいのー？」

「そつちじゃねえ！」

と、北原と冗談言い合えるくらいには元気っぽい。

「げ、誰もいねえ…いや、佐藤！」

「貰った！」

後ろから迫ってくる佐藤を尻目に大きくジャンプした。

「まさか、 Dank!?!」

「私のジャンプ力は53万でえええす!!」

『ピーー!!』

「やったー! 勝ったぞお!」

「ま、負けたー! だがしかし、次は勝つ。」

そこで、試合終了となつて勝ちになった。

「湊! やったな!」

「体鍛えていた甲斐があつた…!」

終わったからかそれぞれで体育館に寝っ転がつて熱を覚ましていた。

「…あ、」

白金先輩と目が合つた。

ので、手を振つてみたら、顔を赤くして振り返してくれた。

あ、他の先輩に捕まつてしまつた…申し訳ないことしたかな…

「なんだ!?! お前よく見たらイケメンじゃないか! ぶっ殺」

「なんだと!?! イケメンは死に晒せ!」

なんて、10人の男で絡んでたら先生が来て叱られた。

ついでに帰り途中に足がつって動けなくなつた。

そして、文化祭の準備が始まつた。

第6話

文化祭の準備。

普通の高校だとこのイベントで付き合う奴らも多いだろう。

それぞれの良いところに気付き、お互いに惹かれていく。そして準備が終わって、早々に告白。

もしくは文化祭終わってから告白。

傍から見ればさつさと爆発しやがれとしか思えないが。

そして、花咲でも文化祭の準備が既に始まり、早数日。

いつもの放課後のようにササッと帰ろうとしたら安田と田中に捕まった。

男子で集まって食事でもしようなどと供述。

断ったがそのまま連行された。

そしてファミレスにて、俺はステーキセットとお代わり用の白米を選び、各々頼んだものを食べ始めた頃。

「そういえば、お前ら。彼女欲しくないか？」

「欲しいに決まってるんだろお！」

「んー、僕はいらぬなあ…」

「お、俺らは画面の向こう側にいるから」

「どうやらこの文化祭で女子にお近づきになりたいらしい。」

「この辺の女子はみんなレベルが高いからなあ…」

「恐らく今回集まった目的としてはそれが一番なのだろう。」

「湊…くん、はどうだ？」

「ここで中島が俺に振ってきた。」

「や、彼女…欲しいけども…」

「欲しいけど…そんな相手今のところいないし。」

「ん？でもお前、2年の白金先輩と一緒に帰ってたりとかしなかったか？」

「と、安田が言った。」

「まさかバレてるとは…一緒に帰る頻度はそんなに多くないんだけどなあ…」

「へえ…俺、白金先輩狙ってるからライバルだな…」

ライバルで：：そうこの中島は、男子の中でもかなり容姿に優れて、髪を金髪に染めて
いる。欲に言うチャラ男。

いつも、島田と一緒に行動しているのを見かける。

言われて見ればバスケの時、シュートを決めたら白金先輩の方にウィンクしてたよう
な：：

ついでに、その近くの先輩方からは黄色い声が上がってた。

「中島は白金先輩狙いか：：スタイルいいもんな。胸大きいし。」

「そうそう、しかも美人だし。流石竜司分かってんな！」

速報、島田の名前が判明した

まあ、健全な？男子ならこれぐらいの会話は普通だろ。

他にもいい所とか可愛いところがいっぱいあるけど、この中で自分だけが知っている
と思うと優越感に浸れますなあ：：

「ついでに俺は、氷川先輩狙ってるんだよね」

「ええ、裕二はあの堅物委員長？まあたしかに美人だけど：：」

速報、中島の名前が判明

結局、島田と中島以外は結局誰を狙ってるかは言わなかった。

その日はそのまま食事をして解散となった。

ついでに彼女いらないうって言ってた方々と仲良くなれた

土曜日の夕方。 たまたま練習が休みだった白金先輩とガンダムをして、家に送る帰り道。

「そういえば白金先輩は彼氏とか作らないんですか？」

今日はサバーニヤとインフイニットジャステイスでタッグを組んでみた。

前々から白金先輩が使ってみたいと言っていたし、戦績も良かったと思う。

「……………え、ええ!? い、いきなりどうしたの…?」

おっとびつくりさせてしまったようだ。

確かにいきなりはまずかったかな…

「や、ちよつと男子のあいだで白金先輩が話題に上がり、気になったので…」

「そ、そうなんだ…。か、彼氏とかは、全然ないよ…!」

「でも、白金先輩美人だから結構告白とかされたりしますよね？」

「び、美人…!？」

あ、えっと…告白とかも全然ないかな…」

美人の件で顔を赤くして、驚いていたということはあまり言われ慣れてないのか…
ていうか今軽々しく美人とか…恥ずかしくなってきた…言ったのは俺なのに…

「そ、そんなんですか…」

「う、うん…」

この後少し気まずい雰囲気でも白金先輩を送り届けた。

唐突だが俺は猫という可愛らしい生き物が好きだ。

昔は飼っていた事があったが、寿命で旅立つてからは新しい猫を飼っていなかった。
しかし、1年ぐらい前のある日。

子猫が川で溺れているところに遭遇した。

母猫は一生懸命運ぼうとしているが川の流れもあり、うまく運べていなかった。

さすがに見て見ぬふりは出来ず、母猫にシャーシャー威嚇されながら家に連れて帰り、すぐに暖かいお湯とタオルを用意し、家にいた母を連れて動物病院へ。

衰弱はしているものの、特に命に別状はなく、母猫の元に返そうと思ったのだが…既

に母猫は居らず、周辺にも見当たらなかった。

とりあえず母猫が見つかるまでは飼うことにしたのだが…結局見つかることは無かった。

子猫は既に成猫になり、家で暮らしている。名前はクロ。由来は黒いから。

「たーでーまー」

そして家に帰るといつも真つ黒な猫がすずの音を鳴らしながら出迎えてくれる。

リビングのソファに座ると膝の上に乗れ丸くなる。

家にいる時はいつも近くにいる。

俺はもちろん、両親にも懐いているが…

「…ただいま」

姉さんにはあまり懐いていない。

「…可愛い…」

リビングに入ってきた姉さんは必ず、膝の上にいる猫を見て頬を緩める。そして視線を上げ俺を睨みつけるのだ。

姉さんが触ろうとしても逃げたりとかはしないが、名前で呼んでもクロから近寄って

いくことは無い。

見てて笑いがこみあげてきそうになったことが何回あるか…
最近はもはや可哀想になってきた。